

第5回研究発表会 発表要旨

国際文化学会は1999年4月6日に本学において、第5回研究発表会と特別講演会を、英語英米文学会・人間科学会と共催で開催した。多数の会員・準会員等を前に、1名の準会員の研究発表、伊藤高章文学部助教授と深見純生文学部教授、さらに日下隆平文学部教授の研究発表、そして小林信彦文学部教授の特別講演がなされ、活発な議論を呼び起こした。研究発表をした準会員は、昨年度3月本学大学院文学研究科国際文化学専攻修了である。以下に、その要旨を掲載する。

見出された南部問題

南部主義者シドネイ・ソンニーノ

La scoperta della quistione meridionale

牧 みぎわ

イタリア国家統一後、この国が当面する政治課題として、南部問題を初めて体系的に取りあげた南部主義者の一人、シドネイ・ソンニーノにスポットを当てる。統一後の国家政策に戸惑い、貧困にあえぐ南部に対して、北部ブルジョア指導階級は当初、何の抜本的な対策も講じなかった。これに強い危機感を感じたソンニーノは、1876年、イタリア統一15年後にして初めての、国家による南部公式調査の結果が、過度に楽観的であったことに直接抗議する意味もこめ、フランケッティと共に南部シチリア島の実態調査書「シチリア 1876」を発表する。綿密で科学的かつ完成度の高いこの調査書は高い評価を受け、前出の国家調査は修正を余儀なくされる。当時の南部では、農民の生活状況が単なる貧困に見舞われていただけではなく、南部社会の構造自

体に深刻な問題があるということが明らかにされた。土地所有と土地契約形態に、その元凶があった。1870年代、南部人口の9割近くを占める下層農民は、農地を殆ど訪れる事のない不在大地主と、その代理として君臨する農地管理人という二重の利害の下に、虐げられていた。また無知な農民に寄生して生きる弁護士や聖職者たちも、彼らの生活に更なる打撃を与えていた。ソンニーノらの調査が初めて、この知られざる社会構造の病を詳細に、辛辣なイタリア政界への抗議をも添えて世に出したわけであった。

しかし、この二人の調査をはじめとする南部主義者たちの試みは、施政にはほとんど効力をもたなかった。抑圧された南部農民の不満はつのがり、1866年のパレルモ騒乱、匪賊の台頭（1865より激化）、1893年～のファッシ・シチリアーニなど、粗野な様相で爆発しており、近代化へ順調にシフトしかけていた北部民の偏見をかっていた。そんな中、科学的に南部の劣勢を主張する差別的南部観も台頭してくる。大衆の反体制蜂起の恐ろしさを実体験し、それがトラウマになっていたソンニーノは、イタリア国家の屋台骨を揺るがすこの傾向を阻止すべく、南部主義者として戦う事を選択した。イタリアにとって最も深刻な南部社会の病を取り除き、深刻な南北格差を是正しなくては、国家の基盤は安定しないと考えたのだ。難題であるこの問題をもてあまし、傍観してきたブルジョア指導層を啓蒙すべく彼は、評論誌上で激しく論戦し、具体的な政策提案を掲げて政府・指導階級に訴えかける。しかしソンニーノの政治的立場は、あくまでも既存のイタリア国家の枠組を受け入れるという前提のもとにあった。そのため、後に自ら政界入りしても、その改良主義的な南部改革の試みでは、矮小に見える仕事しかできず、結果、政治的にも敗北し、保守反動のレッテルに甘んじることになる。

一方、イタリア共産党の創始者グラムシは、南部問題の解決に向けてソンニーノとは対照的なアプローチを行っている。問題意識としてはソンニーノと同じく、南部社会の構造の病がもたらす南部農民の窮状と混乱を「南部社会の大崩壊状態」と明快に図式化して指摘したが、彼の考えた解決の道は、よりラディカルなものであった。最終目標を体制の変革に置いたグラムシの

見解に立つと、ソニーノの極めてブルジョア的で改良主義的な南部改革の試みの甘さが見えてくる。しかしグラムシもソニーノも含め、この時代、南部問題への鋭い視点を持ち、誠実に社会変革を志した南部主義者の試みは、ことごとく封じられてしまった。そして南部は、全く別の選択肢の中で処理され、それから一世紀を経た今も、イタリアの「鉛の足かせ」といわれ続けている。

では南部問題が抜本的な解決に至らず今日まできたのはなぜか？ 南部問題の要はどのように変わってきているのか？ 本稿では、今日のイタリア南部社会を理解するために、あまり知られていない19世紀南部問題の初期の像を改めて浮き彫りにし、この問題に深く取り組んだ人の試みを振り返る事から、新たな視座を得ることが目的であった。それが、統一後一世紀の歩みの中で、イタリアがいかに変遷してきたかを見る際の正しい見方につながればと思う。